安藤歴史　秋第四回１０・２３

Copyright : Takumin

2007年10月23日

14:51

西部弥生文化の展開

- **西部弥生文化の展開**
  - **東日本南部以西では、灌漑型水田稲作技術が定着すると人口が緩やかに増加をし始める。**
    この時期には、まだ旗作物が一定量伴う。
  - **100～300年程度経て、人口が急激に増加する。**
    出土する穀類の中で、米が圧倒的に多くなる。大規模な水田が形成される。
  - **遺跡数の増加とともに集落規模も拡大。**
    環濠集落（弥生時代に特徴的な集落）の成立。
  - **社会が複雑化し始める。**

これが大まかな流れである。西部弥生文化の範囲というのは、弥生時代に少し遅れる形で始まってじわぁっと広がってゆく。

- **人口の増加と社会の複雑化の背景**

＊水田稲作への依存度の高まり(環境収容量増加）→ある一定の面積で支えられる人口量の増加を示す。これを環境収容量という。

水田・灌漑施設の造成・維持に関わる集団労働。

水田・灌漑施設の造成・維持をやれる大きな労働を投資できるような環境でなければならない。静岡県の登呂遺跡とかね。焼いたという板を畦を守るために大量に刺してある。大量の労働力の投下が考えられる。

さらに、千葉県常代遺跡の堰と水路という写真。からも堰を作るという大きな労働投下をしていたのだろうということを伺わせる。

自然的・人的な減収によるリスクが大きくなる。

水田は畑に比べたら生産量も多いし安定性もあるのだが、弥生時代の水田稲作技術は未熟で、ちょっとした環境変化で生産量が増減してしまう。また、複雑化によって人と接する機会が増え摩擦などによりリスクが生じる。そうなると、村として存続すること自体が危うくなる。米に対する依存が強くなると、そのような危険が伴ってくるのである。そうなると、複数の集落の相互依存関係が強まるのである。例えば洪水などによって水田がダメになってしまったときなどは、村同士での協力を形成していればかなり抵抗できるのだと思われる。ということで、複数の集落の相互依存関係が強まってきたと考えられる。

＊生活必需品の外部依存度の高まり

水田に縛られるようになってくると、その地域に密着するようになる。

石材・石器などの動産の生産量、流通量が増加。中期後半以降、鉄器が増加し、後期に石器が消滅。弥生時代を通じて分業が発達。

人口が増えているので人々が用いる動産、書道具の生産量自体が増えている。それだけの道具が必要になってくる。それで一部の動産が集落の周辺でとれないとしたら、外部依存が大きくなっていると考えられる。弥生時代には鉄を精錬する技術はなかった。朝鮮半島経由で日本のもたらされて

いることになる。ということで非常に外部依存性が高い状況が弥生時代後期には生じていた。
鉄の素材を加工する技術はあった。下降ができる集団とできない集団があったわけだが、そこで分業ということが出てくる。様々なレベルで分業が発達することになる。
関東でも素材などから集落内で作ったということがわかる小さな石器と、その他の大きなもので集落内では作っていない石器があり、外部に依存していたことがわかる。

したがって、集落同士の関係の安定が重要になる。外の集団と仲良くしていないと、生活に必要なものが手に入らないので。

ここの集落の存続に複数の集落のまとまりが不可欠になる→「地域社会」の形成へ。
例えば鶴見川流域に弥生時代中期に集落郡があったと考えられるのである。半径数キロの範囲でまとまっていて、全体としては2000～3000の社会的なまとまりが形成されていたのではないかと考えられている。これを一つの地域社会と呼ぶ。これも弥生時代の一つの特徴である。

- 人口の増加と社会の複雑化の背景

＊集落の大規模化
石器・鉄器をはじめとするモノの流通量の増加。水田稲作をはじめ、立地条件の良し悪しが顕在化。
モノが流通するようになると、流通ルートの通り道にある集落は生活必需品が手に入りやすいし、外れている集落は違う。そういう意味では立地条件に良し悪しが生まれる。
→集落ごとの不均衡を拡大する方向に作用。条件の良い場所へと人口が移動する力が働く。

ただし、集落の経済的条件の不均衡の拡大は、集落同士の相互依存関係の安定と矛盾する。
なので崩壊してしまうおそれが出てくる。条件の良い集落は富を集めようとするし、できないところは苦しいわけで、経済的な不均衡が生まれる。これは抑えなければいけないことである。
→相互依存関係を安定化させるための対応。西部弥生文化では、二つの方向性が認められる。
①集落の等規模化・等質化…みんな仲良くやっていこうというような感じ。
横浜市大塚遺跡。集落の周りに壕を作って区画して、その中に縦穴住居が立ち並ぶという感じ。これが典型的な環濠集落の形。これは面白い特徴があって、みんな面積が一緒なのである。どの地域でもね。みんな20000平米前後なのだ。また、集団墓地にも大きさの差など、優劣の差がない。生産性の優劣にも関係なく、集落の均質化が見られる。中期ね。しかし、後期になると、集落のあり方が変化してくる。広い集積地があるところには大きな集落ができ、そこまで大きな水田が作れないところでは小さな集落ができたのである。つまりある何らかの中心的な集団がいて、そこを中心にした地域社会が後期には作られるようになっていたということがいえる。そこで地域差が出ないように過不足なく地域社会に行き渡るような仕組みを作っていたのではないか。その能力があったのなら、それぞれの集落を等規模・均質化しなくても大丈夫なのである。
ということで②中心の明確化なのである。後期になるとある中心を元に地域社会がまとまりを維持している等関係にシフトしているのだろうということね。終末期になるとまたしふとすることもあるんだけどね。ある中心をもとに地域社会がまとまっているという集落のあり方へとシフトしていることがわかるのである。

○　ということで、中期には等規模的・等質的集落郡が形成される。

後期には、中心が明確化。集落規模もまちまち。

○　後期に置ける、人口増加の進行と鉄器の普及。

集落間、地域社会間の不均衡が拡大しやすい。

→集落間、地域社会間の利害を調整する中心の役割が大きくなる。

ただし、中心人物の存在は、あまり顕在化しない。個人の富というものを集積することはしていない。ここに弥生時代の大きな特徴があるのではないだろうか。

一方、近畿地方では大型銅鐸を用いた祭祀が発達。共通の祭祀で、広範囲の集落の関係を安定化。

近畿地方で同じ形を押した銅鐸を共有することによって、地域社会間の関係の維持のためにやっていたということがわかる。

→地域社会間の関係、リーダーの役割が重要になると、逆に集団の一体性を確認する行為が発達。